

目的 被服地から受けるイメージは柄、色、材質、織り方などによって様々に異なり、被服地から被服着装上の効果을 予測推定することは被服設計上大切である。そこで今回、CGにより織り方、配色を変化させたあらゆる服種に使用される格子柄を作成し、被服地として平面におけるイメージを求め、イメージ形成要因を分析した。次にこれらの格子柄の着装状態を作製し、被服地の場合と比較検討した。

方法 格子柄はギンガムチェック、タータンチェック、グレンチェックの3種を選定し先染織物をデザインするMR-PROTXを用い、赤、橙、緑、青の糸を基本色とする33種の被服地をモニター上に作製した。次に上半身のデザイン画を描き、ジャケットに先の格子柄をCADTXによって合成した。被験者は本学学生36名が19形容詞対について5段階で被服地と着装状態を各々評価した。そして因子分析を行い格子柄のイメージを調べ、数量化理論I類により基本色、配色、格子柄の関係を検討した。

結果 因子分析、数量化理論I類の結果、格子柄による被服地のイメージは評価、若さ寒暖の3因子で表され、着装状態のイメージも同様の傾向を示した。被服地、着装状態ともに評価性の因子を高めるには柄がグレンチェック、基本色が青や赤、配色が同等や類似の場合であり、若さの因子には柄がギンガムチェック、基本色が青や赤、配色が類似、寒暖の因子には柄がギンガムチェックやグレンチェック、基本色が赤や青、配色が同等の場合に関係する。そして被服地と着装状態のイメージには大きな差異は今回の実験方法においては認められなかった。